



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	天理大学附属天理図書館所蔵「松前ノ言」について (2)
Author(s)	佐藤, 知己
Citation	北海道大學文學部紀要, 47(4), 53-88
Issue Date	1999-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33736
Type	departmental bulletin paper
File Information	47(4)_PL53-88.pdf



天理大学附属天理図書館所蔵「松前ノ言」について(2)¹⁾

佐藤 知 己

2.3. アイヌ語形の推定

原本の見出し語の順序に従って、仮名書きのアイヌ語を検討する。まず、佐藤(1998)で推定した仮名の音価に基づいて、この文献においてその仮名表記がどのような音連続として読まれ得るのかを示す(これを(仮名)と略称する)²⁾。

次に、それが現在知られているアイヌ語の形式としてはどのようなものに対応する可能性があるのかを示す。その際、最初に金田一(1993)の見解を示し((金田一)と略称)、筆者の採集資料がある場合はその後に添えた((佐藤)と略称)³⁾。

(1) 一あきなひゑ本川く あきなひ志やうといふ事 (1表)

(仮名) [a-ki-na-i-i~e~je-Φo~ho-tsu-ku]

(金田一) akinai 「商い」(日本語), eihok 「売る」, ihok 「買う」

(佐藤) hok 「買う」, ihok 「物を買う」, eyyok 「売る」(千歳方言)

「商い」という語は、アイヌ語の単語としては主な語彙資料(例えば Batchelor 1938, 服部 1964, 久保寺 1992, 田村 1996 等)には見い出されない。アイヌ語では、その後、用いられなくなったものであろうか⁴⁾。

「ゑ本川く」は、金田一の挙げている eihok, ihok のような形式だけでなく、e-hok 「おまえが買う」のような形式を表記したものとも考えられる。その場

合、全体は、akinay e-hok? 「商い（商品？）をお前は買うか」のような疑問文である可能性がある⁵⁾。なお、「本」は和訳の表記では [Φo] あるいは [ho] を表したとみられる例しかないが、おそらく [po], [bo] も表し得たと思われるので、他の解釈の可能性も勿論ある。

なお、資料中に撥音を表記した明白な例がないため、和訳の表記の検討だけからは例証が得られないが、「川く」は語末の k を表記したものと考えられる（他に類例としては(2)の「ゑ川く」がある⁶⁾）。

(2) 一てい多ゑ川く こゝゑミせろといふ事 (1表)

(仮名) [te-i-ta-i~e~je-tsu-ku]

(金田一) teta ek 「ここへ来れ」

(佐藤) tēta 「ここに」, ek 「来る」(千歳方言)

和訳から考えて金田一の挙げている語例は妥当なものであろう。しかし、「ここに、ここへ」に当たるアイヌ語が「て多」でなく、「てい多」のように書かれている点が注目される。服部 (1964: 311) によると、「ここに」は、八雲、幌別、沙流、旭川の各方言で tēta、樺太方言では teeta である。

ちなみに、「風」は服部 (1964: 229) によれば、八雲、幌別、沙流、帯広、旭川、名寄、宗谷の各方言で rēra、樺太方言で reera であるが、「松前ノ言」では「連いら」(85) と表記されている。さらに、「杯」は、服部 (1964: 117) によれば八雲、幌別、沙流、帯広、旭川、名寄、宗谷の各方言で tūki、樺太方言では tuuki (但し、意味は「各人の前に置く酒の容器」) であるが、「つうきう」(97) と表記されている。これらの表記は、これらの単語の初頭の部分が何らかの意味で「長く」発音されていたことを示すものと言え、興味深い⁷⁾。

「ゑ川く」は ek (千歳方言) に相当するものであろう。なお、「川く」については(1)も参照。

(3) 一てい多あ本ん こゝへこゑといふ事 (1表)

(仮名) [te-i-ta-a-Φo~ho-N]

(金田一) *teta ahun* 「ここへ入れ！」

(佐藤) *téta* 「ここに」、*ahun* 「入る」(千歳方言)

「てい多」については(2)を参照。表記と和訳から考えて「あ本ん」に *ahun*(千歳方言)を比定するのは妥当と思われるが、*hu* に「ふ」ではなく、「本」が対応する点が注目される。これは、母音が *o* に近い発音であったことを示すものかもしれない⁸⁾。

(4) 一にしやた 乃ちといふ事 (1裏)

(仮名) [*ni-sija~ja-ta*]

(金田一) *nishatta* 「あした」

(佐藤) *nisatta* 「明日」(千歳方言)

nisatta (千歳方言) に対応する形式であろう。千歳方言の発音では *a* の前で起こる例はないが、服部(1964: 34)は、「すべての *s* を [*ʃ*] と発音する人もある」と述べている。「しや」という表記は、このような音を表したのものかもしれない(「しや」の例は和訳中はないが、「志や」があるので、同様に考えることにする)⁹⁾。また、音節末の *t* に対応する表記が特にみられないことも注目される¹⁰⁾。

(5) 一やいらい介れ 可多しけなきといふ事 (1裏)

(仮名) [*ja-i-ra-i-ke-re*]

(金田一) *iyairaikere* 「ありがとう!」、*yairaike* 「感謝する」

(佐藤) *iyayraykere* 「ありがとう」(千歳方言)¹¹⁾

yayírayke 「感謝する」(同)

iyayraykere 「ありがとう」(千歳方言)に相当する形式であろう。語頭の *i* は早い発音では聞き取りにくいので、このような表記になったものであろうか。なお、*r* はふるえ音、弾き音等であったと思われるが、以下、特に問題

とする場合を除き音声表記にも r を用いる。

(6) 一な可れてい 久しきといふ事 (1 裏)

(仮名) [na-ka~ga-re-te-i]

(金田一) 不詳

不詳だが、「てい」は(2), (3)の例からある種の長い音を表したもののかもしれない。或は, 'inānkarapte「こんにちは」(帯広方言)(服部 1964: 335)に該当する可能性もある。その場合, 現在東部方言として知られている語形が, 過去にはもっと西側にも分布していた可能性を示すものと言え, 興味深い。

(7) 一いらむし可れ 志らぬといふ事 (1 裏)

(仮名) [i-ra-mu-ši-ka~ga-re]

(金田一) iramishkare 「知らず」

(佐藤) eramuskari 「知らない」(千歳方言)

服部 (1964: 160) には 'erāmiskari 「知らない」(沙流等) という語形もみられる。

(8) 一びる可 よき事 (2 表)

(仮名) [bi-ru-ka~ga]

(金田一) pirika (即ち pirka) 「善し」, 「美し」

(佐藤) pirka 「良い」(千歳方言)

初頭の濁点を伴った「び」は, 語頭の pi という当時の日本語では普通ではない音を積極的に表記しようとしたものとも考えられる(他には「び志 > pispis」(96)がある¹²⁾。もっとも, 「おひ多 opitta」(44)のように濁点がない例もある。また, 筆者が観察した諸方言(沙流方言, 千歳方言, 静内方言, 様似方言, 美幌方言等)の発音では, pirka は [pirika] に近い発音であって,

[piruka] のようではない。ここで r に「り」ではなく「る」が対応するのは [pirka] のような発音もかつてはなされていたことを示すものかもしれない、興味深い。なお、「志りく川 ね sirkunne (?)」(19)のように r に「り」が対応しているとみられる例もある。

(9) 一うゑんちき あしき事 (2表)

(仮名) [u-i~e~je-n-tji-ki]

(金田一) wen chiki 「悪いならば」

(佐藤) wen 「悪い」, ciki 「ならば」(千歳方言)

和訳の表記からは不明だが、「うゑ」は we を表そうとしたものと見られる。

(10) 一いしやま ないといふ事 (2表)

(仮名) [i-ſija~{a-ma}]

(金田一) isham-a 「無いよ」

(佐藤) isam a wa 「(人が) 亡くなったよ」, isam ma 「ないよ」

(千歳方言)

「しや」は(4)の「にしやた」と同様、[ʃa] のような音を表した可能性がある。また, isam wa 「ないよ」(千歳方言)は普通 [isamma] のように発音されるので、あるいはこのような発音を表記したものかもしれない。

(11) 一ある者 あるといふ事 (2裏)

(仮名) [a-ru-(pa~ba~Φa~ha~wa)]

(金田一) an 「有る」

(佐藤) an 「ある、いる」, arpa 「行く」, wa 「よ」(千歳方言)

金田一は、「アンは あるといふ事」と翻字しているが、「大なる」(35)、「うる」(40)を表記した字形からみて、「ある者」であろう。また、「者」はアイヌ

語を表記したものなのか、日本語の助詞「は」を表記したものなのか判断し難い。大部分の場合「は」を伴っていないことを考えると、金田一のように断定してよいものかどうか疑問の余地があろう¹³⁾。或は「る」を「ぬ」の誤記と考えることもできる ((13)も参照)。

(12) 一あ多い里い者 た可ひといふ事 (2 裏)

(仮名) [a-ta-i-ri-i-(pa~ba~Φa~ha~wa)]

(金田一) atai-rui 「たかい」、アタイは邦語「あたい」。

(佐藤) ataye 「～の値段」、ri 「(山が) 高い」、wa 「よ」(千歳方言)

「里い」は ri 「(山が) 高い」(千歳方言) かもしれない。「者」は終助詞 wa 「よ」(千歳方言) である可能性もある。

(13) 一あ多ひ者ぬ者 や寿ひといふ事 (2 裏)

(仮名) [a-ta-i-pa~ba~Φa~ha~wa-nu-(pa~ba~Φa~ha~wa)]

(金田一) atai-hanu? 当今は普通 atai-hapur

(佐藤) ataye 「～の値段」、pan 「(塩味が) 薄い、(位が) 低い」

(千歳方言)

服部 (1964: 83) の 'atayé pán 「やすい」(八雲方言) という形式に相当するものかもしれない。ちなみに、千歳方言では「安い」は ataye sawnu である。「者」は終助詞 wa の可能性もある ((11)参照)。もし pan wa のような形式であったとすると、「ぬ」は n と w の間に u のような母音を挿入して発音したことを示すものかもしれない。

(14) 一ゑ川ね いやといふ事 (3 表)

(仮名) [i~e~je-tsu-ne]

(金田一) etune 「いや」、「嫌う」

久保寺 (1992 : 71) に「etūne (v) 嫌ふ, 忌む, 禁ず, 差止める。」とある。
また, Batchelor (1938 : 139) にも「Etunne To abhor.」とある。

(15) 一本しけ まてといふ事 (3 表)

(仮名) [Φo~ho-ji-ke]

(金田一) hoshiki 「待て」

服部 (1964 : 70) に「hōski! 《待て!》」(沙流方言) とある。

(16) 一遍とぶ者 とり可へさうといふ事 (3 表)

(仮名) [pe~be~Φe~he-to-bu-(pa~ba~Φa~ha~wa)]

(金田一) hetopo 「あともどって」

(佐藤) hetopo horka 「あとへもどって」(千歳方言)

hetopo (同) (沙流方言)

「遍」は和訳の表記に用いられた例がない(濁点の付いた「わらん遍」という例は一例ある)が, 「者」と同様に考えてみた。田村 (1996 : 187) には「hetopo また (もどって)」とある。千歳方言では hetopo horka 「逆戻りして」という副詞的表現の中に現れる。「者」は終助詞の wa (または接続助詞 wa 「~して」) である可能性もある。

(17) 一者ん遣ね者 ち可ひといふ事 (3 裏)

(仮名) [pa~ba~Φa~ha~wa-ŋ-ke-ne-(pa~ba~Φa~ha~wa)]

(金田一) hanke 「近い」, ne 「である」は形容詞語尾。

(佐藤) hanke 「近い」, ne 「である」, wa 「よ」(千歳方言)

動詞のあとに ne 「である」が来るのは文法的に問題があるので, 他の可能性を考える必要がある。「者」は終助詞 wa 「よ」かもしれない。

(18) 一ついまくろ とをひとふ事 (3 裏)

(仮名) [tsu-i-ma-ku-ro]

(金田一) tuima 「遠い」, kur は「人」

(佐藤) tuyma 「遠い」, kur (副詞形成接尾辞? 下記参照)

「くろ」がどのような形式に相当するのか、なお一考を要する。田村(1996: 364)は、「ユーカラ(英雄叙事詩……引用者注)の言葉や決まった言い回しの中で、韻律を整える働きをする」kur という形式のあることを述べている。千歳方言の英雄叙事詩にも ko-tanne-kur-sikkeruru 「～を長い間にらみつける」のような語があり、この kur も田村の言うものと同じものであろう。「ついまくろ」の「くろ」はこの kur かもしれない¹⁴⁾。

(19) 一志りく川ねハ くらひとふ事 (3 裏)

(仮名) [ji-ri-ku-tsu-ne-(pa~ba~Φa~ha~wa)]

(金田一) shirkunne 「暗い」

(佐藤) sirkunne 「暗くなる」, wa 「よ」(千歳方言)

金田一(1993: 50)は、「ンと書くべき所がツの仮名で書かれている」場合がしばしばあることを指摘し、その原因として、誤写か、「筆者に促音と発音の書き違い」があったのではないかと述べている。和訳の表記に促音の例がないので促音についてはなんとも言えないが、撥音に関しては、「ん」で書くべきところを「川」で書いた例(あるいはその逆)はない。従って、アイヌ語だけにこのような現象が起こることを説明するためには、草書体の「ん」を「川」と誤読した(及び「川」を「ん」と誤読した)という可能性を否定できないであろう。

なお、「川」は和訳の表記においては11例中10例が「一川(一つ)」のように数詞にのみ用いられ、数詞以外の例としては「者らた川(腹立つ)」(48)1例しかない。これに対し、和訳に「つ」を用いた例は6例ある(「つ者(鐙)」(75)等)。他方、「川」をアイヌ語表記に用いた例は33例あるのに対し、「つ」

は6例である。また「徒」の例も3例ある(「徒つふ tup 二」(100), 「徒川ふい可しま王んふ tup ikasma wanpe 十二」(110), 「徒たら tu tara 二俵」(112))。これらの例だけからは無論なんとも言えないが、強いて言えば、「川」, 「徒」はアイヌ語の表記に主として用いられていると言えなくもない。興味深いのは、アイヌ語表記に用いられた「つ」, 「徒」のほとんどが tu に対応しているとみられることである(「ついまくろ tuymakur (?) 遠くに (?)」(18), 「つら tura 共に」(37), 「ゑつう etu 鼻」(94), 「つうきう tuki 杯」(97), 「つ遍王んふ tupesanpe 八(?)」(106))。これに対し, 「川」は, 「う川まし utumasi まぜる」(33), 「於川ね連 otunere 惜しい」(39)の2例以外は, 判明している限りでは音節末の子音を含む語形に対応する(「ちゑ川ふ cep 魚」(83), 「く川 kut 帯」(60), 「ゑ川く ek 来る」(2)等)。これを要するに, アイヌ語表記に関して言えば, 意図的かどうかは別として, 「つ」, 「徒」と「川」は異なる音を書き分けるために使い分けられた可能性がある。なお, 最後の「ハ」は終助詞 wa 「よ」かもしれない。

(20) 一か者こらち あ川ひもの、事 (4表)

(仮名) [ka~ga-pa~ba~Φa~ha~wa-ko~go-ra-tʃi]

(金田一) korachi は「如し」カハは不詳但し今言う, あついは, イロンネ, 薄いカパラ。

(佐藤) koraci 「~のように」(千歳方言), koraci 「~のように, ~の通りに」(静内方言)

不詳の語。

(21) 一あミこらち う寿ひもの、事 (4表)

(仮名) [a-mi-ko~go-ra-tʃi]

(金田一) 不詳

(佐藤) koraci 「~のように」(千歳方言)

不詳の語。

- (22) 一志り本川遣ハ みし可ひといふ事 (4 表)

(仮名) [ʃi-ri-Φo~ho-tsu-ke-(pa~ba~Φa~ha~wa)]

(金田一) shirpopke は「暑い」 shiritakne は「日が短い」

不詳の語。最後の「ハ」は終助詞の wa 「よ」かもしれない。

- (23) 一者川ちりうゑんハ きれ多るものゝ事 (4 裏)

(仮名) [pa~ba~Φa~ha~wa-tsu-tʃi-ri-u-i~e~je-m~N~ũ-pa~ba~
~Φa~ha~wa]

(金田一) ウエンは wen 「悪」, その他不詳

(佐藤) hácir 「落ちる, 倒れる」, hácire 「落とす」(千歳方言)

不詳の語。([ũ] は鼻母音的な音を, 仮に表記したものである。)

- (24) 一ねく志ゆ なせルといふ事 (4 裏)

(仮名) [ne-ku-ʃi-ju]

(金田一) nepkushu 「何故」

(佐藤) nep kusu 「なぜ」(千歳方言) (hemanta kusu とも)

- (25) 一いほまし か王ひなといふ事 (4 裏)

(仮名) [i-Φo~ho-ma-ʃi]

(金田一) ihoma 「憐む」

服部 (1964 : 332) には, 'iya ná 'ihomá 'as! 「おやおや」(八雲方言) という表現が記録されている。

(26) 一遍たけおまん そこ越ゆけといふ事 (5 表)

(仮名) [pe~be~Φe~he-ta-ke-o~wo-ma-N]

(金田一) hetak 「いざいざ」, oman 「行け」

(佐藤) hetak 「さあ」, oman 「行く」(静内方言)

和訳の表記には「遍*」という濁点の付いた例が一例あるだけであるが、濁点のない「遍」は [pe], [Φe], [he] を表す可能性があったと思われる。

(27) 一うくらむくら 談合せうといふ事 (5 表)

(仮名) [u-ku-ra-mu-ku-ra]

(金田一) ukoramukor 「相談す」

(佐藤) ukoramkor 「相談する」(静内方言)

最後の「ら」は、1人称複数接尾辞の -an を含むものかもしれない。

(28) 一や尔 そなたといふ事 (5 表)

(仮名) [ja-ni]

(金田一) eani,yani 「汝」

(佐藤) eani 「おまえ」(千歳方言)

「やに」は、[ea] の [e] が狭く、また全体が二重母音的に発音される場合があったことを示すものかもしれない。

(29) 一く者ん尔 我といふ事 (5 裏)

(仮名) [ku-pa~ba~Φa~ha~wa-n-ni]

(金田一) kuani 「我」

(佐藤) kuani 「私」(静内方言), káni 「私」(千歳方言)

なぜ「ん」が使われているのか不明である。また、なぜ「や尔」は「やん

尔」としないのであろうか。

(30) 一や尔連ん可い 其方ゆへといふ事 (5 裏)

(仮名) [ja-ni-re-ŋ-ka~ga-i]

(金田一) eani-renkai 「汝のまま」

(佐藤) kamuy renkayne 「神様のおかげで」(静内方言, 千歳方言)

筆者の採集資料に関する限り, renkayne「おかげで」という語は, kamuy renkayne という形式でのみ用いられている。

(31) 一く者ん尔さいそく 我者さんせうと云事 (5 裏)

(金田一) kuani 「我」, saisoku 和語「催促」の入りたるアイヌ語

(仮名) [ku-pa~ba~Φa~ha~wa-n-ni-sa-i-so-ku]

(佐藤) kuani 「私」(静内方言), káni 「私」(千歳方言)

(32) 一こ川ろし 本しいといふ事 (6 表)

(仮名) [ko~go-tsu-ro-ʃi]

(金田一) kor「持つ」, rushui「度し」即ち今日は konrushui というのは「ほしい」事。

(佐藤) kon rusuy 「ほしい」(千歳方言)

「川」は「ん」の誤写に由来するものかもしれない(119を参照)。

(33) 一う川まし 取合てといふ事 (6 表)

(仮名) [u-tsu-ma-ʃi]

(金田一) utumashi 「まぜる」

服部(1964:143)には 'utumas「混ぜる」(樺太方言)とある。他に 'utúmasi「気狂い」(沙流方言)(服部 1964:297)と言う語もあるが関係があるのかど

うか。

(34) 一毛川らいけ いそかしといふ事 (6 表)

(仮名) [mo-tsu-ra-i-ke]

(金田一) monraike 「忙し」

(佐藤) monrayke 「仕事する」(千歳方言)

「川」は「ん」の誤写に由来するものかもしれない(19)を参照)。

(35) 一本ゝろのおん可い 大なる物乃事 (6 裏)

(仮名) [bo-ro-no-o-ŋ-ka-i]

(金田一) poronno okai 大いにある事, 大なる物の事はただ poro でよし。

(佐藤) poronno okay 「たくさんいる」(千歳方言, 静内方言)

濁点は語頭の [po] を意識的に表記しようとしたものか。

(36) 一本んハ ちいさきものゝ事 (6 裏)

(仮名) [Φo~ho-m~N~ũ-(pa~ba~Φa~ha~wa)]

(金田一) pon 「小さい」前条 poro の対

(佐藤) pon 「小さい」, wa 「よ」(千歳方言)

「は」は wa 「よ」かもしれない。

(37) 一く者んにや可多つらおまん 我やとへいさと云事 (6 裏)

(仮名) [ku-pa~ba~Φa~ha~wa-n-ni-ja-ka~ga-ta-tsu-ra-o~wo-ma-N]

(金田一) これは和人のよく言う日本語流のアイヌ語なり。kuani 「我」, yakata 「館」, tura-oman 「共に行く」

(佐藤) kuani 「私」, tura 「一緒に」, oman 「行く」

(静内方言)

金田一が述べているように、アイヌ語として自然な表現かどうか問題がある。現代のアイヌ語では、「私の館」は, ku-kor yakata のようになるであろうし、「一緒に行こう」ならば複数形を用いて paye-an ro のようになるであろう。

(38) 一よこ多満 いますこしそいよと云事 (7表)

(仮名) [jo-ko~go-ta-ma]

(金田一) ukotama は、「一緒に加う」、「一緒にする」即ち ukotama ! は「もっと加えよ」

服部 (1964 : 143) には 'ukótama 「混ぜる」 (名寄方言) という語が載る。これに不定人称接辞 i- 「(漠然と) 物, 人」の付いた i-y-ukotama 「物を混ぜる」のような語を表記したものであろうか。

(39) 一於川ね連 そふ多といふ事 (7表)

(仮名) [o~wo-tsu-ne-re]

(金田一) otunere は, そんなにたくさんまけてやっては「惜しい」という事。

不詳の語。「川」は「ん」の誤写である可能性があるとすれば, あるいは uwonnere 「聞き届ける」 (千歳方言) のような語を表したのかもしれない。

(40) 一ね遍本可 ナル、うるといふ事 (7表)

(仮名) [ne-pe~be~Φe~he-Φo~ho-ka~ga]

(金田一) nep-eihok-a 「何売る？」

金田一の解釈の他に, nep e-hok ya 「何をおまえ買うか」という形式も考えられる。

(41) 一志ゆ川なうハ 満ことゝいふ事 (7裏)

(仮名) [ʃi-ju-tsu-na-u-(pa~ba~Φa~ha~wa)]

(金田一) ションノーというつもりなるべし。「真実」は, 今 shonn なり。

(佐藤) sonno 「本当に」(千歳方言)

「志ゆ」は [ʃu] のような音を表記したものかもしれない ((4)を参照)。「川」は「ん」の誤写に由来するものかもしれない。「なう」は和訳の表記中に例はないが, 長音を表したものかもしれない。また, 最後の「ハ」は日本語の助詞とは即断できない。

(42) 一志ゆ川遣いハ うそといふ事 (7裏)

(仮名) [ʃi-ju-tsu-ke-i-(pa~ba~Φa~ha~wa)]

(金田一) このツモンにて, シュンケなるべし。「虚偽」は今 shunke なり。

(佐藤) sunke 「嘘を言う」(千歳方言)

「志ゆ」, 「川」については前項参照。「遣い」は長母音, 「ハ」も日本語ではない可能性がある(前項参照)。

(43) 一者てき これ者可りといふ事 (7裏)

(仮名) [pa~ba~Φa~ha~wa-te-ki]

(金田一) patek 「こればかり」

(佐藤) patek 「ばかり」(千歳方言)

(44) 一おひ多 ミなといふ事 (8表)

(仮名) [o~wo-i~Φi~çi-ta]

(金田一) opitta 「みな」

(佐藤) opitta 「皆」(千歳方言)

(45) 一こゝろ志ゆ川きハ つくなひといふ事 (8表)

(仮名) [ko~go-ko~go-ro-ji-ju-tsu-ki-(pa~ba~Φa~ha~wa)]

(金田一) kooroshutki は励ますこと, つぐないは今 ashimbe という。

(佐藤) koorusutke 「要請する」(静内方言)

不詳の語。

(46) 一らい遣おまん 志んだといふ事 (8表)

(仮名) [ra-i-ke-o~wo-ma-N]

(金田一) rai 「死ぬ」, oman 「行く」, raike 「殺す」, oman 「行く」

(佐藤) ray 「死ぬ」, ike 「～して」, oman 「行く」(静内方言)

ray ike oman という表現自体は現代ではないと思われるので、「遣」は別の解釈が必要かもしれない。

(47) 一志川とまれやいの可年 た者け又うつけといふ事 (8裏)

(仮名) [ji-tsu-to-ma-re-ja-i-no-ka~ga-ne]

(金田一) shitomare yainu kane 変に思う, 不思議に思う。

(佐藤) iyohaysitomare 「あきれた!」(千歳方言)

不詳の語。sitoma とすればなぜ「川」が入るのだろうか。

(48) 一かもいゆるしか なせ者らた川と云事 (8裏)

(仮名) [ka~ga-mo-i-ju-ru-ji-ka]

(金田一) kamui irushka 神怒

(佐藤) kamuy iruska 「神が怒る」

mu に「も」が対応する点に注意される。

- (49) 一あふらさけ よき酒乃事 (8 裏)

(仮名) [a-Φu~pu-ra-sa-ke]

(金田一) apuru sake 美酒なり。此語古くより見ゆ。蝦夷藪話には「油酒」,
蝦夷随筆には、「上酒, アブラサケ」。

不詳の語。

- (50) 一うまんさけ あしき酒乃事 (9 表)

(仮名) [u-ma-ũ-sa-ke]

(金田一) umama sake は「並酒」, 劣る酒の意。

不詳の語。

- (51) 一い川可れ にこりさけの事 (9 表)

(仮名) [i-tsu-ka~ga-re]

(金田一) 不詳, 今は yayanshake, shirarikorsake。

不詳の語。

- (52) 一ちいあまも めし乃事 (9 表)

(仮名) [tʃi-i-a-ma-mo]

(金田一) chi 「煮たる」, amam 「米, 穀物」

(佐藤) ci 「煮える」, amam 「穀物」(千歳方言)

- (53) 一可んたち かうしの事 (9 裏)

(仮名) [ka~ga-n-ta-tʃi]

(金田一) kamtachi 「麴」, 古く入った和語。

(佐藤) kamtaci 「麴」(千歳方言)

この時代に既に「麴」は kamtaci に相当する語であった点が注意される。

(54) 一あまも 米之事 (9 裏)

(仮名) [a-ma-mo]

(金田一) amam 「米」, 「穀物」

(55) 一毛川可り よき乃事 (9 裏)

(仮名) [mo-tsu-ka~ga-ri]

(金田一) mukara 「斧」

金田一はモツカラとしているが、あきらかに「り」の誤写である。「川」はなぜ入るのだろうか。

(56) 一乃可うし 可ま乃事 (10 表)

(仮名) [no-ka~ga-u-ji]

(金田一) nokaush は「模様の附いている」。

不詳の語。金田一は「ノカウシ かまの事?」と疑問符を付している。「釜」か、「鎌」か、判断し難い。

(57) 一ちきらい つきの事 (10 表)

(仮名) [tji-ki-ra-i]

(金田一) チキラヒ つきの事?

不詳の語。

(58) 一志やら遍ちめんふ 遣んふるいの事 (10 表)

(仮名) [ji-ja-ra-be-tʃi-me-ũ~m-pu~Φu]

(金田一) sharampe chimip 「絹布類のきもの」

(佐藤) saranpe cimip 「絹の着物」(静内方言)

「ちめんふ」という表記の「ん」は不可解な表記である。さらに研究を要する。また, saranpe の n にあたる表記がないのはなぜであろうか。(98)も参照。

(59) 一毛めんちめんふ 毛めんるいの事 (10 裏)

(仮名) [mo-me-n-tʃi-me-ũ~m-pu~Φu]

(金田一) momen chimip 「木めんのきもの」

(佐藤) cimip 「着物」(静内方言)

「ん」は「川」の誤写であろうか。(62)も参照。

(60) 一く川 おひの事 (10 裏)

(仮名) [ku-tsu]

(金田一) kut 「帯」

(佐藤) kut 「帯」(千歳方言)

(61) 一遍可ち又可なちとハ ちいさき女の事 (10 裏)

(仮名) [pe~be~Φe~he-ka~ga-tʃi, ka~ga-na-tʃi]

(金田一) hekachi は「少年」, 「かなち」は青森方言和語「童女」

(佐藤) hekaci 「少年」(千歳方言), matkaci 「少女」

(千歳方言)

金田一は「ヘカチヌカナチ」とするが, 「ヌ」は「又」の誤りであろう。

「かなち」は不詳の語。Batchelor (1938 : 229) には「kanchipo, A girl.」とある。

(62) 一おん可い わらん遍`の事 (11 表)

(仮名) [o~wo-ŋ-ka~ga-i]

(金田一) わらんべの事というのは前条のヘカチの訳, okkai は壮年男子。

(佐藤) okkay 「男」(静内方言), okkayo 「男」(千歳方言)

「ん」は「川」の誤写かもしれない。語の意味が現在の資料とは異なり、子供を指す点が興味深い。

(63) 一たぐう て、乃事 (11 表)

(仮名) [ta-gu-u]

(金田一) ホクウにて hoku 「おっと」か。

(佐藤) tan kur 「この人(夫を呼ぶ言い方)」(千歳方言)

不詳の語。和訳の表記に濁音の「ぐ」はほとんど使われない。アイヌ語の表記にわざわざ濁音の「ぐ」を用いた理由は何であろうか。

(64) 一めのこし 女乃事 (11 表)

(仮名) [me-no-ko~go-ŋi]

(金田一) 古く入りたる和語, 女の子衆。正保の松前旧記などにも夷女をメノコシと見ゆ。

(佐藤) menoko 「女」(千歳方言)

不詳の語。

(65) 一とくい おとこの事 (11 裏)

(仮名) [to~do-ku-i]

(金田一) 「男」の事が, 「得意」という語の古く入ったもので入魂の間柄, 親友にいう, 従って「情人」。

(佐藤) kotokuyne 「〜と仲良くする」(静内方言)

(66) 一あ川遍い 火の事 (11 裏)

(仮名) [a-tsu-pe~be~Φe~he-i]

(金田一) アペの訛か、今みな ape という。

「川」が用いられている点と、「遍い」のように長母音を示したとも受け取れる表記を用いている点は原因がよくわからない。

(67) 一王川可 水乃事 (11 裏)

(仮名) [wa-tsu-ka~ga]

(金田一) wakka

(佐藤) wakka 「水」(千歳方言)

(68) 一せゝ川可い ゆ乃事 (12 表)

(仮名) [se-se-tsu-ka~ga-i]

(金田一) sesek wakka 「湯」、sesekka 「熱する」

服部 (1964: 95) には sesekka 「湯」(美幌方言) という形式が載る。ただし最後の「い」が何を表しているのか不明である。

(69) 一せう なへの事 (12 表)

(仮名) [ʃo:]

(金田一) ショウというつもりか、正しくは shu 「鍋」

(佐藤) su 「鍋」(千歳方言)

「志ゆ」ではなく、「せう」と表記している理由は何であろうか。これも母音が [o] に近いことを示すのであろうか。

(70) 一可せう 志やくしの事 (12 表)

(仮名) [ka~ga-ʃo:]

(金田一) カシュプ即ち kashup は「杓子」

(佐藤) kasup 「しゃもじ」(静内方言)

前項参照。p を表記していないが、そのような例については次項や(89)も参照。

(71) 一糸遍連け 小刀乃事 (12 裏)

(仮名) [i~e~je-pe~be~Φe~he-re-ke]

(金田一) epirikep 「小刀」

服部 (1964:121) には, 'epirkep 「小刀」(旭川方言その他) が載る。

(72) 一遣ん本 者の事 (12 裏)

(仮名) [ke-ũ~m-Φo~ho]

(金田一) kempo 「針」

(佐藤) kem 「針」(千歳方言)

「本」は指小接頭辞 -po に相当するものであろうか。

(73) 一きらい くしの事 (12 裏)

(仮名) [ki-ra-i]

(金田一) kirai 「櫛」

(佐藤) kiray 「櫛」(静内方言)

(74) 一糸むし 可多なの事 (13 表)

(仮名) [i~e~je-mu-ʃi]

(金田一) emush 「刀」

(佐藤) emus 「刀」(千歳方言)

(75) 一ちゑ川者 つ者の事 (13 表)

(仮名) [tʃi-i~e~je-tsu-pa~ba~Φa~ha~wa]

(金田一) seppa 「鰐」, 和語「切羽」の入ったもの。

(佐藤) seppa 「鰐」(千歳方言)

se に「ちゑ」が対応する理由は不明である。あるいは、当時の「せ」が [ʃe] のような音であったので, [se] のような発音をこのように表記した可能性もある (しかし, (4)も参照)。

(76) 一本川者き 者、きの事 (13 表)

(仮名) [Φo~ho-tsu-pa~ba~Φa~ha~wa-ki]

(金田一) pon paki 「脛衣, ハバキ」

不詳の語。

(77) 一本うし まい可けの事 (13 裏)

(仮名) [Φo~ho-u-ʃi]

(金田一) hoshi 「脚絆」

不詳の語。

(78) 一つう本う 本うしの事 (13 裏)

(仮名) [tsu-u-Φo~ho-u]

(金田一) 未詳

不詳の語。

(79) 一志や類、 鶴の事 (13 裏)

(仮名) [ʃi-ja-ru-ru]

(金田一) sharorun

(佐藤) sarorun 「雲雀?」(千歳方言)

n の表記に相当するものがないのはなぜであろうか。(58)も参照。

(80) 一ち可川ふ 白鳥の事 (14 表)

(仮名) [tʃi-ka~ga-tsu-pu~Φu]

(金田一) chikap 「鳥」, peker-chikap 「白鳥」

(佐藤) cikap 「鳥」(千歳方言)

(81) 一里可 くしらの事 (14 表)

(仮名) [ri-ka~ga]

(金田一) 鯨は普通 humpe

服部(1964:93)には rika (-kirpu, -hu)《鯨・イルカの白肉》(八雲方言)という語が載る。

(82) 一遍ろ川け に志んの事 (14 表)

(仮名) [pe~be~Φe~he-ro-tsu-ke]

(金田一) heroki 「鯨」

服部(1964:190)には herōki 「鯨」(幌別方言その他)という語が載る。

(83) 一ちゑ川ふ 可らさけ事 (14 裏)

(仮名) [tʃi-i~e~je-tsu-pu~Φu]

(金田一) chep 「魚」特に「鮭」

(佐藤) cep 「魚」(千歳方言)

(84) 一ち川ふ ふ年乃事 (14 裏)

(仮名) [tʃi-tsu-pu~Φu]

(金田一) chip 「舟」

(佐藤) cip 「舟」(千歳方言)

(85) 一連いら 可せ乃事 (14 裏)

(仮名) [re-i-ra]

(金田一) rera 「風」

(佐藤) réra 「風」(千歳方言)

「連い」という表記は長母音を表したものとみられるが、樺太を除く現在知られている方言で [re:ra] のような発音をする方言は知られていないようである。この資料の年代が古いものと思われることを考えれば、樺太で採集されたものとは考えにくい。かつては北海道方言にも樺太方言のような長母音を有する方言があったことを示唆するものであり、注目に値する ((2), (3), (97)も参照)。

(86) 一あふと あめの事 (15 表)

(仮名) [a-pu~Φu-to~do]

(金田一) apto 「雨」

(佐藤) apto 「雨」(千歳方言)

(87) 一者ふる ふる事 (15 表)

(仮名) [pa~ba~Φa~ha~wa-pu~ru]

(金田一)? hapur は「柔らかい」

不詳の語。

(88) 一可もい 月乃事 (15 表)

(仮名) [ka~ga-mo-i]

(金田一) kamui は「神」。「月」は chup kamui。

(佐藤) kamuy 「神」(千歳方言)

(89) 一里いこ 本しの事 (15 裏)

(仮名) [ri-i-ko~go]

(金田一) rikop 「星」

服部 (1964 : 223) には rikop 「星」(美幌方言) とある。美幌方言にはアクセントの対立がないし、樺太方言では keta という形式であるので現代の資料ではわからないが、「里い」という表記は、この語がかつては第一音節にアクセントを有したか、長母音を有していたことを示すものといえ興味深い。

(90) 一志や者 あ多満の事 (15 裏)

(仮名) [ʃija~ʃa-pa~ba~Φa~ha~wa]

(金田一) shapa 「頭」

(佐藤) sapa 「頭」(千歳方言)

(91) 一ぬんま けの事 (15 裏)

(仮名) [nu-m-ma]

(金田一) numa 「毛」

(佐藤) numa 「身体の毛」(千歳方言)

「ん」がなぜ用いられているのか不明である。(29), (95)も参照。

(92) 一き志やら みゝの事 (16 表)

(仮名) [ki-ʃija~ʃa-ra]

(金田一) kishara 「耳」

(佐藤) kisar 「耳」(千歳方言)

- (93) 一志き まなこの事 (16 表)
(仮名) [ʃi-ki]
(金田一) shiki 「眼」
(佐藤) siki 「～の目」(千歳方言)

- (94) 一糸つう 者な乃事 (16 表)
(仮名) [i~e~je-tsu-u]
(金田一) etu 「鼻」
(佐藤) etu 「鼻」(千歳方言)

語末の「う」は不詳。あるいは etuhu 「～の鼻」という語形を表したものかもしれない。

- (95) 一遣んま あしの事 (16 裏)
(仮名) [ke-m-ma]
(金田一) kema 「足」
(佐藤) kema 「足」(千歳方言)

「ん」を用いた理由は不詳。

- (96) 一び志ゝ 王しの者 (16 裏)
(仮名) [bi-ʃi-bi-ʃi]
(金田一) 未詳, 但し, 『蝦夷藪話』には鷺の尾羽ヒシヒシと見ゆ。

不詳の語。

- (97) 一つうきう さ可つき (16 裏)
(仮名) [tsu-u-ki-u]
(金田一) tuki 「杯」

(佐藤) túki 「杯」(千歳方言)

末尾の「う」は説明がつかない。語頭が長母音と思われる表記をなされていることについては(2), (85)も参照。

(98) 一い多き ちやうき (17 表)

(仮名) [i-ta-ki]

(金田一) itanki 「椀」, 『蝦夷記』には, 椀イタキ

(佐藤) itanki 「椀」(千歳方言)

「ん」を用いていない理由は不詳。(58)も参照。

(99) 一志ね川ふ 一川の事 (17 表)

(仮名) [ʃi-ne-tsu-Φu~pu]

(金田一) shinep

(佐藤) sinep 「一つ」(千歳方言)

(100) 一徒川ふ 二川の事 (17 表)

(仮名) [tsu-tsu-Φu~pu]

(金田一) tup

(佐藤) tup 「二つ」(千歳方言)

(101) 一連川ふ 三川の事 (17 裏)

(仮名) [re-tsu-pu~Φu]

(金田一) rep

(佐藤) rep 「三つ」(千歳方言)

(102) 一いね川ふ 四川の事 (17 裏)

(仮名) [i-ne-tsu-pu~Φu]

(金田一) inep

(佐藤) inep 「四つ」(千歳方言)

現代の資料ではアクセントが初頭の開音節にあるにもかかわらず、「長い」表記が施されていない点に注意される(なお(85)も参照)。

(103) 一あしきね川ふ 五川の事 (17 裏)

(仮名) [a-ʃi-ki-ne-tsu-pu~Φu]

(金田一) ashiknep

(佐藤) asiknep 「五つ」(千歳方言)

(104) 一ゆ王んふ 六川の事 (18 表)

(仮名) [ju-wa-m~ũ-pu~Φu]

(金田一) iwanpe

(佐藤) iwanpe 「六つ」(千歳方言)

末尾の「ふ」は説明がつかない。現在のアイヌ語では、「物、人」を意味する接尾辞には-p (母音の後), -pe (子音の後) という二つの異形態があるが、本資料の作成者はそれに気づかず、5までの数詞の類推で、数詞の末尾には「ふ」を付けると考えて勝手に作り出した形であろうか。とは言え、そういうことができたとすれば、ある意味でアイヌ語をよく研究していたという見方もできるかもしれない。

(105) 一ある王んふ 七川の事 (18 表)

(仮名) [a-ru-wa-m~ũ-pu~Φu]

(金田一) aruwampe

(佐藤) arwanpe 「七つ」(千歳方言)

末尾の「ふ」は説明がつかない。

- (106) 一つ遍王んふ 八川乃事 (18 表)

(仮名) [tsu-pe~be~Φe~he-wa-m~ũ-pu~Φu]

(金田一) tupesampe

(佐藤) tupesampe 「八つ」(千歳方言)

末尾の「ふ」は説明がつかない。また、「王」は「さ」の誤写とも考えられる。

- (107) 一志ね遍さんふ 九川乃事 (18 裏)

(仮名) [ʃi-ne-pe~be~Φe~he-sa-m~ũ-pu~Φu]

(金田一) shinepesampe

(佐藤) sinepesampe 「九つ」(千歳方言)

末尾の「ふ」は説明がつかない。

- (108) 一王んふ 十ヲ乃事 (18 裏)

(仮名) [wa-m~ũ-pu~Φu]

(金田一) wampe

(佐藤) wanpe 「十」(千歳方言)

末尾の「ふ」は説明がつかない。

- (109) 一志ね川ふい可し満王んふ 十一乃事 (18 裏)

(仮名) [ʃi-ne-tsu-pu~Φu-i-ka~ga-ʃi-ma-wa-m~ũ-pu~Φu]

(金田一) shinep 「一つ」, ikashma 「余り」, wampe 「十」即ち「十余り一つ」。

服部(1964:261)には, sinép 'ikásma wánpe 「十一」(沙流方言その他)という語が載る。末尾の「ふ」は説明がつかない。

- (110) 一徒川ふい可しま王んふ 十二乃事 いつ連もこのとをり尔かそへ申
候 (19 表)

(仮名) [tsu-tsu-pu~Φu-i-ka~ga-ji-ma-wa-m~ũ-pu~Φu]

(金田一) tup ikashma wampe 「十余り二つ」

服部 (1964 : 261) には, túp 'ikásma wánpe 「十二」 (沙流方言その他)
という語が載る。末尾の「ふ」は説明がつかない。

- (111) 一志ねたら 壹俵乃事 (19 表)

(仮名) [ji-ne-ta-ra]

(金田一) shine tara

(佐藤) sine tara 「一俵」 (千歳方言)

アイヌ語の tara は日本語の「俵」から来たものであろうが、この時代に既に tara という形であつたらしいことは注目される。

- (112) 一徒たら 貳俵の事 (19 裏)

(仮名) [tsu-ta-ra]

(金田一) tu tara

(佐藤) tu 「二つの」, tara 「俵」 (千歳方言)

- (113) 一志ねと 壹升の事 (19 裏)

(仮名) [ji-ne-to~do]

(金田一) shine to

不詳の語。金田一は「一斗」と翻刻するが、「一升」の誤りであろう。

- (114) 一志ね志け 壹束の事 (19 裏)

(仮名) [ji-ne-ji-ke]

(金田一) shine shike

(佐藤) sine sike 「(物を数える時) 二十」(千歳方言)

(115) 一志ねてふ ひとひろの事 (20 表)

(仮名) [ʃi-ne-te-pu~Φu]

(金田一) shine tem

日本語表記の例はないが、「てふ」は [tʃo:] のような音を表した可能性もあると思われる。

(116) 一志ねおろし 壱者の事 (20 表)

(仮名) [ʃi-ne-o~wo-ro-ʃi]

(金田一) 未詳

不詳の語。

(117) 一志ねもととり いち王の事 (20 表)

(仮名) [ʃi-ne-mo-to~do-to~do-ri]

(金田一) shine motontori 和語「もとどり」の転。

不詳の語。

3. おわりに

「松前ノ言」は、成立年代がアイヌ語資料としては古い年代に属することはほぼ確実であるが、語数も多くなく、正確な成立年代や筆者名も含めた成立事情がよくわからないため、その資料的価値についてこれまで正当な評価がなされて来たとは言い難い。しかし、研究の結果、次のような特徴を有する

ことが明らかとなった。

- a. 「一かもしゆるしか なぜ者らた川と云事」までが、「……という事」という訳語が与えられ、それ以後は「あふらさけ よき酒乃事」のように、「……の事」となっており、句と語を区別して編集してあると思われること。
- b. 日本語と異なる発音を表記するのに工夫がみられること（濁点の使用によって語頭の pi, po を表記したとみられる例があること、また, tu を表すのに「つ」、「徒」を用い、「川」を音節末の p, t, k の表記に主として用いたとみられること等）。
- c. 今日、アクセント核を有すると考えられる位置に長母音と思われる表記を施していること。

これらは「松前ノ言」がある程の体系的な特徴を持っていることを意味しており、旅行者の記録とは単純に同一視できないアイヌ語資料としての精度の高さを示唆するものである。特に, c は、これまでアイヌ語諸方言の比較によってのみ推定されていたアイヌ語のより古い姿を文献的証拠によって立証する可能性を示しており、中には「里いこ」(89)のように現代の諸方言の記録がないものも含まれている。この文献がアイヌ語研究上極めて重要な資料であることを示す特徴の一つと言える。

注

- 1) 本稿は佐藤 (1998) の続稿である。作成にあたっては、平成 10 年度文部省科学研究費 (奨励研究 A, 「古文獻に現れたアイヌ語方言の研究」, 研究代表者佐藤知己) の一部を利用した。また、作成にあたり、石塚晴通先生、豊島正之先生には原本の所在について御教示を得た。石塚先生にはまた、前稿における原本の料紙に関する筆者の記述についてご専門の立場から御注意をいただいた。宮沢俊雅先生は、佐佐木信綱『百代草』の関係部分を複写してお送り下さったばかりでなく、天理図書館所蔵の『國籍類書目録』について懇切な御教示をして下さった。小野芳彦先生は資料の電算処理にあたって御助力いただいた。これらの諸先生、並びに天理図書館に深く感謝申し上げる。また、アイヌ語を教えて下さった話者の方々 (白沢なべ氏 (千歳方言)、織田ステノ氏、秋田ヨネ氏 (静内方言)、上田トシ氏 (沙流方言)、岡本ユミ氏 (様似方言)、菊地股吉氏 (美幌方言))

に感謝の意を表します。

- 2) 一つの仮名に複数の音価が想定される場合は～記号で示す。また、アイヌ語の形式の一部が日本語の助詞「は」か判別のつき難い場合は()でくくって示した。表記には音声記号を使用した、[ni] を [ni] とし、ラ行子音をすべて [r] で表記するなど、必ずしも厳密なものではないこととお断りしておく。日本語の仮名の音価そのものにも多くの問題があり、今後の課題としたい(例えばウ段音は [w] の可能性もあろう)。なお、資料の絶対量が多くないので、かならずしも全ての可能性を尽くしていないこと(たとえば「き」には濁音の用例はないが、濁音も表記し得た可能性は十分考えられる)や、日本語表記とアイヌ語表記が一致するとは限らないこと(たとえば「川く」はアイヌ語の表記では音節末子音 k を表記する意図で用いられた可能性がある)など、他にも問題が少なくないが、極力、この資料における日本語表記の用例に忠実であることを基本方針とした。すなわち、現在知られているアイヌ語の語形から、比較的容易にその仮名表記の意味するところが明らかに思える場合(たとえば「ㇿ川く」が ek「来る」を表したのであること)であっても、あえてそれに頼ることは避けた。明らかにすべきは当時のアイヌ語であって、現在のアイヌ語に基づいて当時の日本語表記を云々することは方法論としては本末転倒と言わざるを得ないからである。なお、見出し語に通し番号を付し、用例の引用にあたってその番号を()に入れて示す。
- 3) アイヌ語の形式の引用にあたっては、原文の表記を尊重する。金田一などの sh, ch, 二重母音の副音の i, u はそれぞれ現在では s, c, y, w と表記されるのが普通である。なお筆者採集の形式の表記には i, e, a, o, u, p, t, k, c, s, m, n, r, w, y, h を用いる(この他に声門閉鎖音があるが、表記は省略する。また、語頭の開音節にアクセントが来る場合を除き、アクセントの表記は省略する)
- 4) 「商い」には「商品」という意味はないようである(『広辞苑』, 『日本国語大辞典』による)。
- 5) 服部(1964: 83)によれば、「売る」は、'e'ihók (八雲方言), 'e'ihok (幌別方言, 名寄方言), 'éyyok (沙流方言, 帯広方言), 'eyyok (美幌方言), 'éiyok ~ 'éyyok (旭川方言), 'ehok (宗谷方言)である。「ㇿ本川く」という表記と離れすぎず、文法的にも可能な形式を想定するとすればむしろここで述べた e-hok「おまえが買う」ではないか。
- 6) 日本語表記の研究だけではアイヌ語の音形の推定はできない。日本語にないアイヌ語の音をどのように表記したのかわからないからである。これを解決するためには、言語史が解明されている外国語(ラテン語, ポルトガル語など)を同時代の文献が仮名でどのように表記しているかに関する研究が参考になると思われるが、本稿の範囲を越えるものである。今後の課題としたい。
- 7) 筆者が実地に観察し得た千歳方言でも, tēta「ここに」は第一音節にアクセント核を有し(第一音節が高い), 第二音節にアクセント核を有する(第二音節が高い) tēta「このあいだ」と対立を示す。ただし, [te:ta] のように発音されている例はこれまでのところ

見あたらない。服部(1967:222)は、アイヌ語北海道方言の高さアクセントの対立は母音の長短の対立から後から発達したもので、母音の長短の対立を有するカラフト方言はこの点で古形を保っている、とするが、本資料の表記は服部のこの仮説を支持するものと言える。詳細は今後の研究をまたなければならないが、千歳方言では、túnas「早く」のような副詞的に用いられる語が強調的イントネーションで発音される場合には[tu:naʃ]という第一音節が長い発音も現れるが、réra「風」、túki「杯」のような名詞で[re:ra], [tu:ki]のような発音が現れることは普通はないようである(切替英雄氏によれば、旭川方言、十勝方言も同様であるとのこと)。本資料の「連いら」、「つうきう」のような表記は長母音か、長母音がアクセントの対立へと移行する過程で余剰的な特徴として残っていたことを示すものかもしれない。また、(3)の「てい多」も同じ形式を表記したものと考えられるので、この「てい」という表記は、誤写や偶然的な要因によるものとは思われない(もっとも、これらの他、開音節の第一音節のアクセントあるいは長母音では説明のつかない表記もある(「志ゆ川遣いハ」、(42)あつう「鼻」(94))。

- 8) 「本」、「ほ」はアイヌ語の ho,po に対応し、hu に対応する例は他にない。他方、「ふ」が hu に対応する確実な例は皆無であり、音節末の p(「あふと apto 雨」(86),「ち川ふ cikap 鳥」(84等), pu(「あふらさけ apuru sake 美酒」(49))に対応する。
- 9) sa を [ʃa] のように発音する話者は、筆者が直接観察し得た方では静内方言の秋田ヨネ氏がそうであった(例:sak [ʃak]「夏」)。
- 10) 和訳の表記には促音の確実な例がない。「取合て」のような場合に促音があったかもしれないが、特に表記はされていない。
- 11) ai が二重母音の場合には、今日では ay のように表記するのが普通である。
- 12) 例えば、『日葡辞書』では pi が語頭に現れるのは、「ぴんぴん(馬が跳ねる)」のような擬態語の例しかない。また、佐藤(1998:43)でも述べたが、初頭の「び」は、原本では点が三つ付いているように見え、従って半濁点のようにも見えるが、あくまでも点であって、積極的に丸とみなすべき根拠はない。また、他の例では明らかに濁点であって、半濁点と見なすべき例はない。
- 13) 他にも「あ多い里い者」(12),「あ多ひ者ぬ者」(13)のような判断の困難な例がある。これらの「者」はアイヌ語の終助詞 wa「よ」を表記したとみることも可能である。
- 14) なお、音節末の r に相当する比較的確実な表記例が「びるか」(8),「志り」(19, 22),「ゑ遍れけ」(71)しかないので、r を「くる」でなく、「くろ」と表記するのがこの文献でどの程度一般的なのかはなんとも言えない。

参考文献

- Batchelor, J. 1938. *An Ainu-English-Japanese Dictionary*. 4th ed. Tokyo: Iwanami Shoten.
- 知里真志保. 1954. 「分類アイヌ語辞典第三巻人間篇」. 『日本常民文化研究所彙報』. 68. 東京：日本常民文化研究所. (知里真志保. 『知里真志保著作集』別巻 II 所収)
- _____. 1962. 「分類アイヌ語辞典第二巻動物篇 (遺稿)」. 『日本常民文化研究所彙報』. 87. 東京：日本常民文化研究所. (知里真志保. 『知里真志保著作集』別巻 I 所収)
- _____. 1975. 『知里真志保著作集』別巻 II. 東京：平凡社.
- _____. 1976. 『知里真志保著作集』別巻 I. 東京：平凡社.
- 服部四郎 (編). 1964. 『アイヌ語方言辞典』. 東京：岩波書店.
- 服部四郎. 1967. 「アイヌ語の音韻構造とアクセント」. 『音声の研究』13. 東京：日本音声学会. 207-223.
- 金田一京助. 1924. 「世界最古の蝦夷語彙……佐々木博士所蔵の『松前の言』について」. 『心の花』28-4. 東京：竹柏会出版部. (金田一京助全集編集委員会 (編). 『金田一京助全集』第六巻所収)
- _____. 1960. 「アイヌ語学講義」. 金田一京助. 『金田一京助選集』I. 東京：三省堂：3-244.
- _____. 1993. 金田一京助全集編集委員会 (編). 『金田一京助全集』第六巻. 東京：三省堂.
- 久保寺逸彦. 1992. 『アイヌ語・日本語辞典稿』. 札幌：北海道教育委員会.
- 佐藤知己. 1995. 『「蝦夷言いろは引」の研究』. 札幌：北海道大学文学部.
- _____. 1998. 「天理大学付属天理図書館所蔵「松前ノ言」について(1)」. 『北海道大学文学部紀要』46-3. 札幌：北海道大学文学部. 41-64.
- 田村すゞ子. 1996. 『アイヌ語沙流方言辞典』. 東京：草風館.